

## 素琴三回忌追善集『花降道』

伊藤善隆  
(立正大学)

### 摘要

松江の美濃派俳人である素琴の三回忌追善集『花降道』(文政二年(一八一九)刊、個人蔵)を翻刻紹介する。

キーワード：俳諧、美濃派、『花降道』、我々窟素琴、素笛

### はじめに

「素笛編『花降道』(文政二年(一八一九))は、松江の美濃派俳人素琴の三回忌追善集で、備前・石見・亀嵩・神門・三刀屋・宍道・佐世・久野・大東・下分・松江・加茂の美濃派俳人たちの追善句が入集している。すなわち、本書は素琴の伝記資料として重要であるだけでなく、先に翻刻した「田部松声編『まつのはれ』」得々庵中哉四十賀記念集―(『立正大学大学院紀要』第三十六号、令和2年3月)と合わせて見ること、化政期の出雲各地における美濃派俳人の分布を具体的に知る資料としても貴重である。

扉に「校輯」者として名前が載る素笛については、序文に「子息素

笛子」とある。さらに、跋文には「素笛・琴吹、二風子の追孝」とあるから、本書入集の琴吹も、素琴の息であることが判る。また、序文を記した桃花園は、『まつのはれ』に「マツエ」の俳人として入集する。そして、「扉に「修撰」者として名前が載る昨非庵・楚白坊は、『新選俳諧年表』(書画珍本雑誌社、大正12年12月)に、それぞれ「文政七年 甲申 ▼昨非歿、九月十二日、蟬脱庵と号す、朝伍門、出雲松江人」、「文政元年 戊寅 ▼楚白坊歿、素琴門、出雲人」と記載がある。この楚白坊の没年は、本書跋文に「其折から、楚白坊、都より病で歸りて筵に連なり、何くれと指揮せるも、四十九日の比はいと重くなりて、同じく泉下の人となれり」とあることと符合する。

なお、本書は国文学研究資料館が公開している「国書データベース」に未登録の俳書だが、本稿の底本とした個人蔵本の他、鳥根県立

古代出雲歴史博物館にも一本が所蔵されている。

〈書誌〉

書型……刊本。半紙本一冊（縦二二、七cm×横一六、一cm）。

袋綴じ。楮紙。

表紙……香色原表紙。

題簽……原題簽。中央無辺。「花降道 全」。

扉……梓線中を界線で区切り、「寝々窟追善 昨非庵 修撰／花ふるみち／黒素笛 校輯」（中央は白抜き文字）。

版式……無辺無界。每半葉一〇行。

字高……一四、九cm（浄土く桃花園）（第二丁裏八行目）を計測）。

刊記……「蕉門書林／皇都寺町通二條／橋屋治兵衛梓」。

丁数……全二五丁。

備考……扉（第一丁）裏に素琴の肖像画を載せる。裏表紙見返しに「此主 以文」と墨書あり（以文は第十六丁表一行目に入集）。なお、第十一丁裏八行目「ころ」との「と」、第廿丁表七行目「節句も」の「も」、第廿五丁表二行目「短き筆を」の「を」は、朱筆で書き足して修正するが、

古代出雲歴史博物館蔵本も同様である。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。

異体字等は概ね通行の字体に改め、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「を」つけ、（ ）内にそ

の丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。  
参考のため、原本の参考図版を末尾に示した。  
難読箇所は□で示した。

〈翻刻〉

花降道 全

┌（表紙）

寝々窟追善 昨非庵 修撰

花ふるみち

黒素笛 校輯

┌（一オ・扉）

（寝々窟素琴肖像）

┌（一ウ）

寝々窟老人在し日は、已に齢にも俳諧にもいと老て、楽をきはめられたり。さればやすく終をとりて一句を長き世のかたみとせられしを、子息素笛子、念仏ともろともひびきをつぎ、これかれ打よりて終に追福の一章となる。其七との間の作善および一周三回の忌辰も又是にならひて、戯論俳諧を正風の経だらにと手向られける」（二二オ）  
誠に諸法実相のことわり、皆是仏法の金言たのみあれば、四方の知音の聞つたへくにとぶらひよせられたるも、皆これ讚仏乗のたすけなるべしと、あはせて梓にものして月花の尽ぬかたみと見るべきはや

浄土にて是も三とせの花と見む

桃花園

「(二二ウ)

辞世

古人 素琴

行道はあかるき花の浄土かな

娑婆は涙に袖の春雨

灯炎の影も臙に月落て

御立をふれる鉄棒の音

雪隠を覗けば内に咳ばらひ

存もよらぬほとゝぎす啼

早苗とる比とて空のしめぐと

西院サイは都の里つゞきなり

さる程に妾いなせて物思ひ

長い葉にはつと吞あく

霜月の霜も霰と降かはり

わびておかしう出来し猷立

身代をつかひ潰して智恵自慢

盆からおもひ付て回国

いかな事雨の気はない月の照

つゞれさせてふきりぐす鳴

梅散て其後訪はぬ伯母のもと

新参が肩に樽と重箱

野と山も霞でねがらわけがない

すれ違ひ行囊舟の嗅

頭痛かたとへども更に物いはず

似仙

「(三二ウ)

ふられて寐たる夜こそつられ  
かりぐと何か鼠のかぢり出し  
寺も納所の留主は淋しき

そばの粉をこねはこねたが棒がない

冬は湯治もまれな山中

松風の間マは井関の水の音

承久以来今に浪人

月ふけて北斗の星をふし拌み

残る暑もしらぬ楼

先以匂ひめでたき稻の花

呼れてありく御師の相伴

鞠ばかま入た処をうろおほへ

五七日こち降はせなんだ

天人もあまくだります花の雲

実妙なりやうぐひすの脛

右歌仙行

二七日

前書略

常ならずちるや彼岸の南無桜

おもかげに立つ塚の陽炎

鳥も今還本栖と囀りて

荒壁ながら普請出来梟

月を見て関守身こそおもしろき

笑ふて逃し南瓜盗人

右歌仙行下略

和友

雪心

不背

亀六

喜朝

交月

直郷

甫水

霜後

成童

芳春

姿先

朝洒

楚白房

麻嶺

「(四一ウ)

春声

左和

素笛

呉濤

麻岑

霜後

三十七日

成仏の姿や塚にほとけの坐

眉仙

空は花ふる紫の雲

魯雪

菅笠に身軽き蝶を連にして

琴松

二里も三里も旅ごゝろ也

似仙

湖の水氷かどけふの月

芳春

色づく稲に国土安全

和友

全下略

四七日

残る香をしたふや塚の梅の花

呉濤

関伽も涙にぬるむ衣更着

琴松

遠山の霞ばかりに雪もなし

菊子

索引して見る篠張の弓

姿先

夏瘦のそろくもどる月の影

成童

浅漬馴てきりくす啼

梅溪

全下略

五七日

月入てあとと涙に眼のおぼろ

菊子

西へむかへばかほる梅が香

琴路

馬駕籠に上方路は春めきて

貫道

暦は当にならぬ照ふり

朝洒

見物も鼻息つめて鞠の会

雪心

全下略

六七日

人の扇を鹿相千万

ト一

「〔六〕オ」

焼香に空も卯の花曇かな

歌川

ともに鳴けとや山郭公

以楚

歌枕杵を草鞋にはきかへて

琴路

わかりかねたる人の物言ひ

仙菊

肴荷を舟から上の在明に

朝烏

のこる暑の夏も同前

鶏雄

全下略

七々日

其魂も爰に遊ぶやほとゝぎす

麻嶺

四十九日は卯の花の月

琴吹

大勢が寄てかゝつて餅搗て

楚白房

前乗の間にあはず風呂敷

さわ

温泉の町を淋しい雨に降しづめ

素笛

亥子にあれがなふて珍重

琴路

代官の乗物からの御挨拶

菊子

終に手負の猪は逃たり

いそ

いつしかに昼の日脚は八ツ下り

姿先

さすり起して薬のませる

似仙

鬼灯に機嫌の直るいもの神

朝洒

踊がすんで秋もひつそり

芳春

忍べとて月もそろく闇になり

成童

独歩行の在伍中將

雪心

立聞の罪は噓にあらはれて

霜後

引張過た屏風倒るゝ

洗竹

掃除日の天気、遣ふ朝の花

春声

「〔六〕ウ」

「〔七〕オ」

山は雉子なく智恩教院

呉濤

学問も春の風に責られて

魯雪

按摩の代で足らぬ買喰

琴松

出つ入つ船の絶間のあらばこそ

梅溪

曇ていとゞあつい六月

秀李

偏尾な連には込るいせ参

歌川

下略

追悼

亡父生前に茶俳の二道を深く楽しみ、又涅槃臘八の会などには正倉山に面壁の膝をまじへ、ひそかに雲霧の「八」底をさぐり常に罪をゆるし賞をもらさざる生得、あやまたずも心しづかに末期の念仏寐入が如く往生ありけるは、ありがたしと感ずる中より、猶むせかへる名残のなみだこそとゞめられね

御仏の昔やけふの此別れ

素笛

海山の恩徳も公務の暇なく「八」ウ家事のことしげきにまぎれて生前に一つの致さざるは悔の八千度かへらねば、せめて今より俳諧の追善を、こたらず営み、靈魂をなくさめ奉らむと愁の中に一句を吐く

花悔し亡骸送る夢ご、ち

琴吹

我生れて十七年のとし月日夜朝暮に深く膝下の「九」オいつくしみをうけしは、誠にわするべ

からざるに、はた此きさらぎのけふのわかれの悲

しさは猶しもわすれがたく、落るなみだを打はら

ひて一句を吟じ、香華をさ、げ奉る

是も山二日灸の菓子の恩

琴路

山高き恩や歎も冴返り

みち

死花のお顔悲しき別かな

さわ

艸餅を居へて拜ん其笑顔

しけ

花水に泣腫た影いつ迄ぞ

いそ

前書略

涅槃会も七日は忌て死出の旅

僧 李暁

月花におもへば惜しき別かな

恵固

世はかくと思ひながらも春淋し

雪心

我風雅の師と頼置る寝々窟の老人、期来りて黄泉

の客となられけるは、いとほみなき事にぞ有ける。「十」オされや其報恩の一つにもと一句

に追善の心を休て靈前に備ふる事しかり

むめが香の猶したはしや散て後

楚白房

わたる燕のさ、やきに聞へて、石見がたよりいた

みの心をかいつけ送る

行厂や悔みの文も片だより

昨非房

一周忌

前書略

花はまだ咲やさかぬに一めぐり

琴吹

かたみ嘶を鶯も鳴く

素笛

絹物の法度守れば暖とくて

潤ふ雨の晴ぎはもよし

かつきりと残れる月のきよらかさ

唐黍ぞよく端町の裏

相撲見の屋ぐら太鼓に足も空

落したきせるひろふ友達

観音の御蔭で過る禁むら

瀧の流れの笥から来る

関札に桐の木青き堀の内

昼かとはかり夏の宵月

髭剃れど湯はゆるされぬ病上り

将基さす手のかるい袖なし

出船に仕切をせつく矢の使

から雷の逃てごろつく

藤を見るふりに人待つ松の陰

里下りころとくの恋のさまぐ

長閑けくも土鍋に匂ふ鰯汁

三軒茶屋の今は六軒

竹嗽ていつ迄敵たづねかね

兄弟同じ様な夢見る

凧に生田の森の明しらみ

勅使はめつたやたら詠歌

献立の結句むづかし魚嫌ひ

行燈のせる大釜の上

篠を突く雨のかしらを忍び出

左和

琴路

琴松

いそ

菊子

呉濤

魯雪

仙菊

貫道

麻岑

朝酒

成童

和友

壺仙

呑乙

応山

東明

維中

亀六

直郷

交月

不肖

ト一

朝鳥

鶏雄

若い時には神も御ひるき

頼母しも三日月講の仲ま衆

秋の詠めもまた端の寮

色鳥の餌も拾はずに飛廻り

休んだ跡か結柴のちり

市毎によし頼まる、塩油

暖簾まざれぬ立波に亀

孫彦の手向さ、ぐる花合せ

百味の膳も芳しき春

右歌仙行

三回忌

から人はけふまで喪をいとなむと聞くに

俣ならば三とせも塚にすみれ草

蝶もかげろふ閑伽の水桶

俵つむ孝行の徳あた、かに

あくたを焼た灰奇麗也

しらぐと在明月の薄消て

野分にむかふ市人の笠

かけかはる新酒の杉葉たのもしき

狂歌でものを祝しはんべる

愛妾の左孕はひそか事

四国ほどまづ和睦調ふ

おもしろや西へ東へ帆かけぶね

ひとり麦蒔く岡の長作

それ鷹を尋て廻る昼の月

雪心

李暁

春声

姿先

似仙

霜後

芳春

昨非庵

喜朝

素笛

昨非庵

春声

琴吹

菊子

琴松

琴路

魯雪

仙菊

梅溪

芳春

梅溪

芳春

梅溪

芳春

梅溪

「(十二)オ」

「(十二)ウ」

「(十一)ウ」

「(十三)オ」

雲も見えぬに雨のこぼる、  
能い娘出て泊る気の旅籠宿

時の用には紙入の櫛

満開と聞て俄の花催ひ

都のぐるり藪もうらゝか

遅き日をあはれもまるゝ車牛

あづかり君は兔角出家気

しづかなるけはいに匂ふ豆麩汁

風に折く斧の遠音

鶯は老ぬ禁のまつり過ぎ

塩魚付てもどす傘

丁稚迄心のきいた浜問屋

早八ツになる棟石の影

はら／＼と下城の鈴も篠薄

様々に名をなふる桂男

立尽す恋の染木も秋の夜に

ふしはむかしの磴の諷歌

売葉の価もとらず配り行

爰も三丁違ふ枝道

見るうちに綿繰出す岫の雲

しびりざましに茶の水をくむ

賑かに跡弔ふも花ざかり

光り長閑き積善の家

右歌仙行

似仙

霜後

和友

麻岑

成童

朝酒

貫道

ト一

鶏雄

朝鳥

雪心

歌川

素紅

知遊

維中

直郷

交月

喜朝

亀六

秀李

不肖

桃花園

呉濤

名録

裸でも頓て済む身を更衣

褥敷て灸すへばや花の中

青柳やあつふさ赤き繫馬

氣いらちに咲て瘦けり梅の花

田植見や蠅のすくなき祢宜が宿

蛙鳴や我家の風呂に旅心

夕顔や袖引に出る厚化粧

櫻欄の皮剥れて寒し無住寺

春雨や呉服屋とめて京嘶

四辻を吹違ひけり秋の風

瀬の音の上江り行砧かな

あら蓑にたはれかゝるや雨の蝶

名にしおふ嵯峨へはいなで羽抜鳥

売卜の編笠で居る時雨哉

重なりて田螺くづるゝ日和哉

椎柴に誠みせたるしぐれかな

貧乏な宿を出立や大黒舞

菓子持て伯母の見に行踊かな

明月やみな寐てくらき台所

開帳の札かたぶきて春おしむ

客たえぬ村の大家や鯨とり

八重椿古風な庭にさかりかな

禅寺に泊りこゝろや虫の声

備前

松雨

漂萍

不先

松秀

固口

柳亭

石見

幽水

玉川

糸竹

素石

魚口

里朴

休芳

撫玉

鶴影

李仙

夏涼

有方

以文

市桃

一枝

李蹊

如一

砧うつ隣やひびく手杵米

涼しさや青物店の朝じめり

汐艸を冠にかけて神迎へ

梅が香に炭の香通ふ書院哉

雲にのる術も得たりな不二詣

猿曳の我子は負ふた事もなし

藪入の耳に付たる笈かな

昼貞や蓬瘦たる砂ばたけ

春雨や物申なしに出入る人

淡雪におもたき牛のまぶた哉

陽炎や箒のちりに立まじり

呑干して溜る清水にたばこ哉

温泉の山に相合傘や春の雨

若草に鼎のあとや神の庭

菜の花の中や参宮の笠の波

畑打や昼から乾く土二寸

広庭に蟻の餌を引く暑かな

螢火も雨夜はちらず草の中

藪潜る水青ぐらく鳴水鶏

かたちより這ふ跡太き田螺哉

白雲を腰に帯てや化粧山

雨一日雪減る里の霞かな

虫の音や油つぎ行常夜燈

垢付かぬ朝風呂寒し梅の花

素友

春江

寄嶺

湖舟

野酔

林下

里山

亀嵩

項獅

陶酔

汀柳

昶

其明

竹舍

壺滴

嶋砂

白圭

逸性

玉峯

巴琴

松人

固有

芦洲

梅伍

桂里

「〔十六〕オ」

「〔十六〕ウ」

「〔十七〕オ」

掃庭となりて柳のしだけけり

蚊遣火や煙這出るむかし家

鍋提て来る人もあり門納涼

夕立の晴て牛の子戻けり

漕舟の帆に曳れ行霞哉

女房は麦ばたけより紅の花

梅ちるや又うごき出す旅心

鶯や琴の音通ふ御殿藪

曲水や影もかさなる小盃

松風に心のかよふ納涼かな

かくれ家に徳をつゝめる紙衣哉

松風は今を盛に枯野哉

茶の花や京へ仏師の去る時

鈴虫や音も千早振神楽岡

卯の花の雪寒げなり木賃宿

行春や袂にのこる京の塵

笹粽解くには下手もなかりけり

天地の肌あはせてや初ざくら

畑打に子はあづけてや揚雲雀

岩山に入かねる日や紅づくし

落鮎や子にやつるゝはあの通り

茶の花や逗留尼の京言葉

壺溪

花溪

花亭

櫻川

一如

神門

呑乙

臥山

静汗

静勇

静橘

静路

霞風

静旦

長歌

霞鳥

静□

三万屋

東明

喜朝

交月

維中

六道

繁之

白扇

「〔十八〕オ」

「〔十七〕ウ」

行春をとらまへてみむ糸桜

不染

金借の撫ていぬるや簾

画風

佐世

不男について局の花見哉

梅旭

公家領や畑は見えず桐の花

梅甫

七昼夜や嫁は眠りの死いそぎ

霞柳

ふり売の宝もあるや年の市

皎月

菊酒や一盃過る病上り

吞候

久野

庇飛ぶ霰の影や道具店

夏峯

留主事に嫁取祢宜や神無月

寿山

蓑笠に盆も節句も案山子哉

撫龍

大東

萩はらや一夜別時の鉦の音

井花

卯の花の山端過れば闇夜哉

鳥光

山吹や井出の紺屋の門流れ

瓢楽

先へ来た客は出ありく月見哉

一知

豆麩屋が朝寐の門や茄子市

喜扇

齒を染る手もとは暗し鳴竈虫

女くら

恋病やばら／＼髪に更衣

桃弟

春雨や針手休めて仮名双紙

いさ

海棠に唐様を書く娘あり

春水

羽だ、きの眼にしむ鳥や秋の雨

言人 杖候

万年の亀の直安し放生会

鶴仙

一本は寺の隣の桜かな

有銭

長生の盃くれよ菊作り

夏山

真直に風の吹行枯野かな

竹子

名月やいづこへ天の川違へ

夏旦

雲も霧も絶たる峯の紅葉哉

僧 李眺

拝領の羽織たるや桜もり

文寿

下分

一羽来る手負の鴨や寺の池

蛙水

八ツ七ツ氷る最中や鐘の声

松翠

八百屋より魚屋で売れる若和布哉

昨非庵

朝貞の花にもくれん閑伽水

赤水

神の名はしらねど拝む清水哉

麻嶺

辻堂へ人を吹込む野分哉

一角

取上た手の筋見ゆる氷かな

成童

鳴うづら月の野藪に隠れけり

草樹庵

汐風は松にふかせて汐干哉

和友

松江

狗の一声鳴くや稲光り

芳春

雪催ふ湖や帆の風二三合

桃花園

雨晴や螢もえ立岸根草

梅溪

魂棚や野に寝た様な灯の明り

破窓堂

青柳や是も江口のかりの宿

秀李

今は眼を養ふ色や田の青み

漁村

袖の花やつかと寄られぬ薄月夜

知遊

酒桶に洪のほひの暑かな

松蘿

青田から海へ届くや風の筋  
 出がはりや井戸も名残の水かゞみ  
 初霜や下女が手にする釣瓶縄  
 源氏よむ女あるじや牡丹畑  
 物わすれして来た顔の燕かな  
 遣梅や匂ひつらぬく壁の穴  
 行込めば能い山里や夕霞  
 雨降て土場へ届く柳哉  
 気の晴るゝ水の音也野路の梅  
 襟垢を露に清めてかし小袖  
 長閑さや海の上行鶴の声  
 空も今霞を脱て更衣  
 臘八や猪猿壳に山を出  
 山門を鳥も巢立や仏生会  
 粽結ふ中や刃物の草がくれ  
 墨嗅き画師の欠びや春の雨  
 夜嵐のくねりのこるや栗畑  
 初雪に安い価や鬮ぎ柴  
 凧の池の水迄からしけり  
 順礼は噂ばかりに花見哉  
 狼の昼寐の床も枯野哉  
 たゞ一日火宅出たる蓮見哉  
 背帯の昔やししのぶ田植囃  
 かたびらの色にもゆかし京の水  
 香をとめし花の袂を更衣

ト一  
 鶏雄  
 朝鳥  
 素紅  
 霞川  
 花精  
 三戸  
 貫道  
 夢蝶  
 似仙  
 朝洒  
 霜後  
 素笛  
 琴吹  
 菊子  
 琴路  
 呉濤  
 琴松  
 魯雪  
 仙菊  
 洗竹  
 左和  
 しけ  
 いそ  
 つね

「〔廿一〕オ」  
 「〔廿二〕ウ」  
 「〔廿二〕オ」

十二三の娘雛見の名残哉  
 関取を次良よと呼ぶや母の親  
 山守が年賀もかねて花見哉

みち  
 春峨  
 春声

「〔廿二〕ウ」

終焉年之吟  
 蛤の楼閣見ばや鍋の湯気  
 珠数をくる軽さや今の更衣  
 何ぞ角ぞ実なりて待や渡鳥  
 炭斗に瓢きる日や初しぐれ

寝々窟  
 素琴

「〔廿三〕オ」

追加  
 近江路の春や五里来てゆふづく日

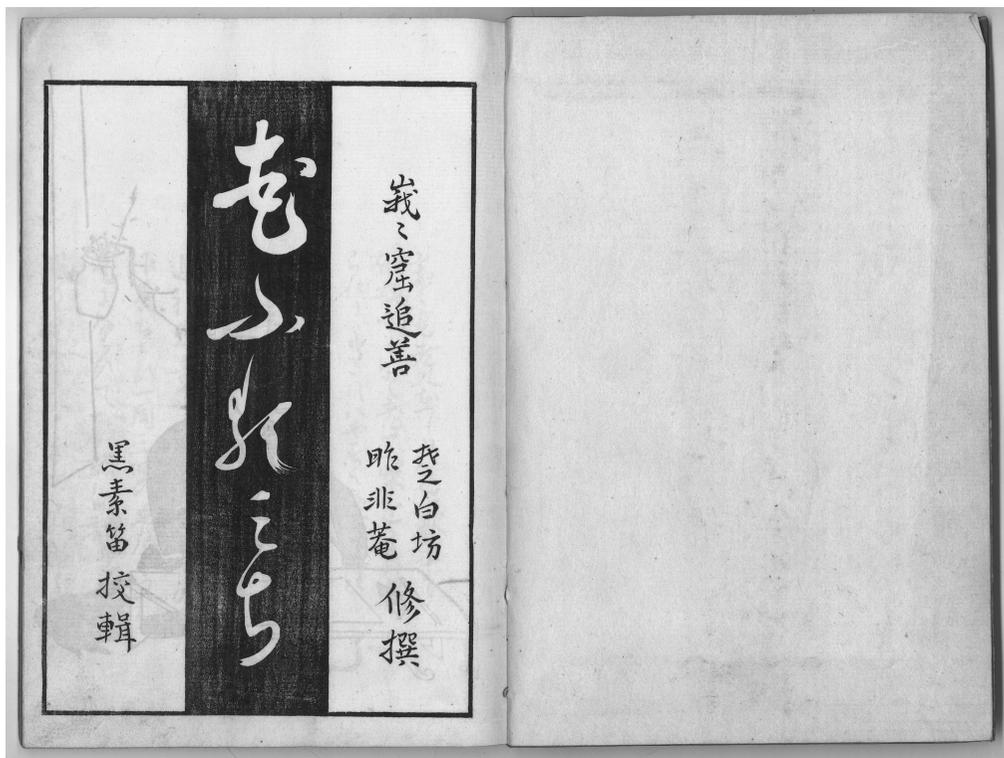
徐風庵

「〔廿三〕ウ」

此一巻は、素笛・琴吹、二風子の追孝より先人  
 峨と窟のかたみに残されし花の一句を唱導と  
 し、七日／＼の作善の中の俳諧、ならびにつき  
 てつゞれる冊子也。其折から、楚白房、都より  
 病で帰りに筵に連なり、何くれと指揮せる、も  
 四十九日の比はいと重くなりて、同じく泉下の  
 人となれり。予、其程は石見「〔廿四〕オ」濁  
 に漂ひ、波のよるべの音信にき、つゝ、帰るさに  
 立より、やうやくちりみだれたる草稿、所との  
 名録、これかれかこち艸の刈そろへ役にさ、



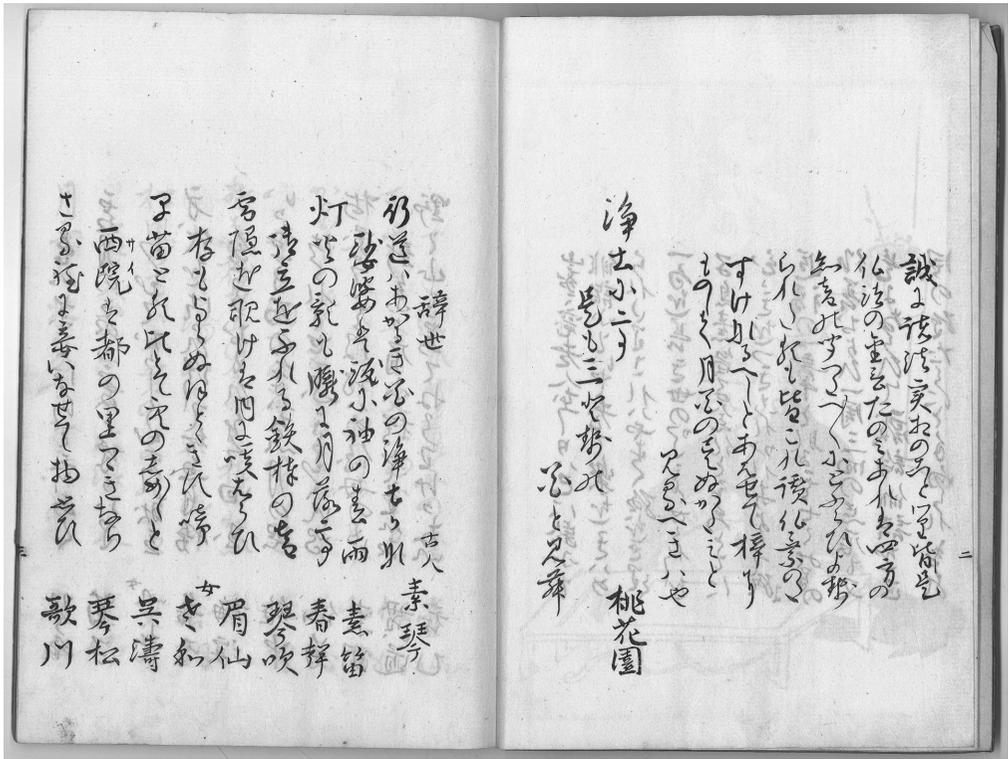
〔図版2〕表紙見返し・扉（一才）



〔図版3〕素琴肖像（一ウ）・序文巻頭「二」才



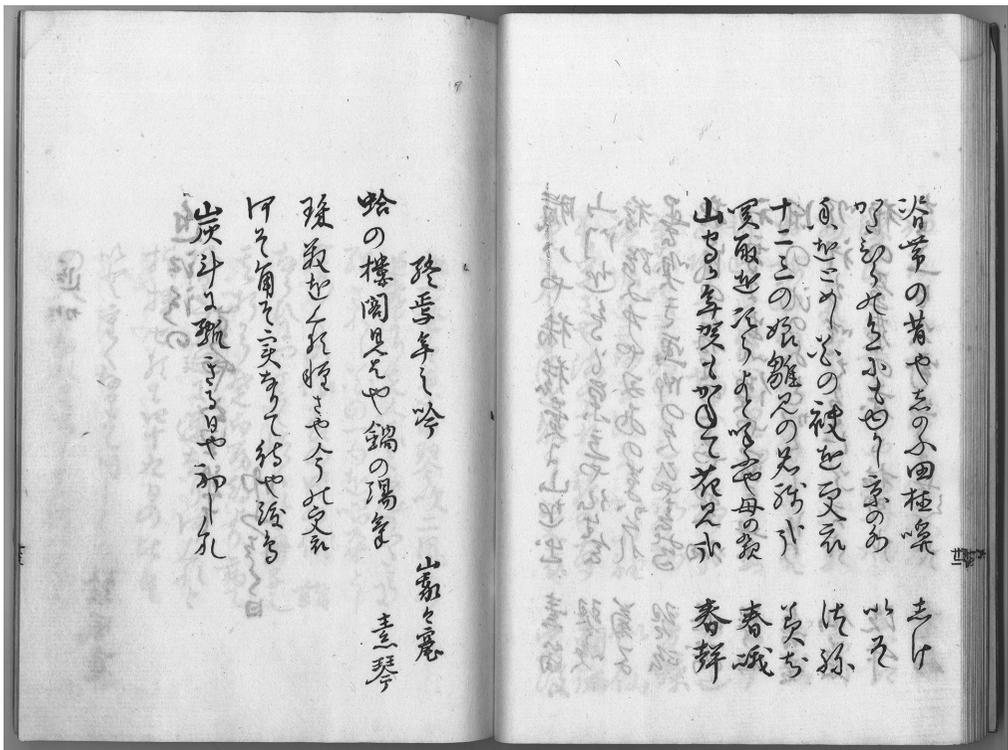
(図版4) 序文末尾(二二ウ)・本文巻頭(二三オ)



素琴三回忌追善集『花降道』(伊藤善隆)

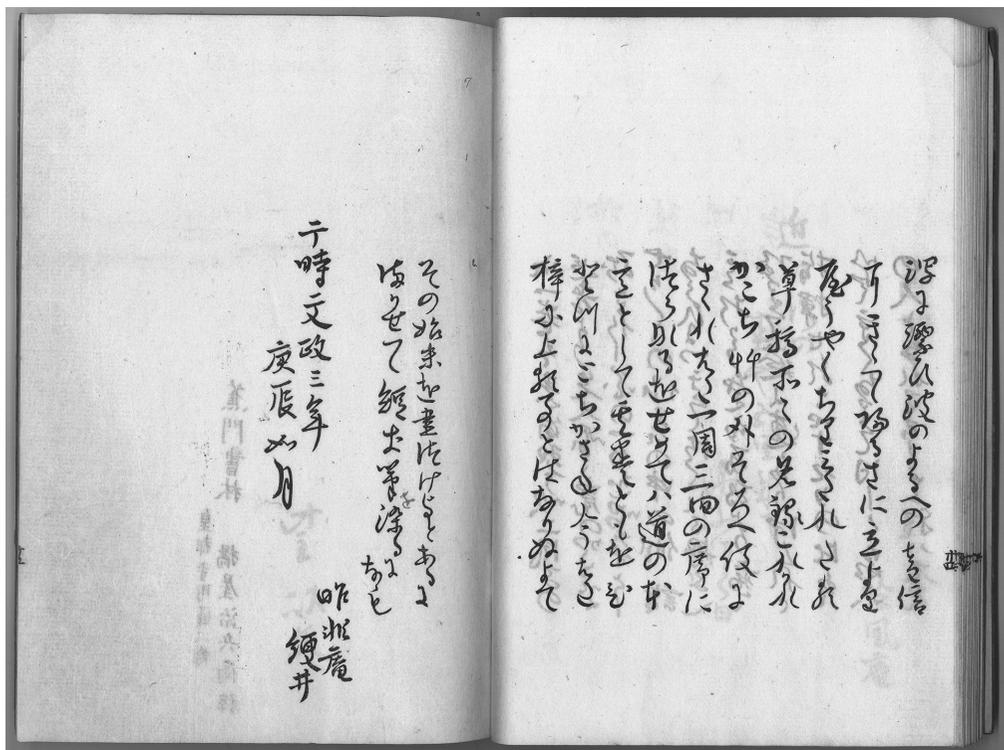
此道、あつとるの浄土の  
 燈の光も燦々月夜  
 空は起取けた四は夜を  
 存もとらぬはくは  
 子苗これに元の前と  
 西院と都の里でさくら  
 さふゆい善いせし物さ  
 素琴  
 煮留  
 春輝  
 琴吹  
 眉仙  
 女  
 無滞  
 琴松  
 歌川

(図版5) 巻末(廿二ウ)・「廿三オ」

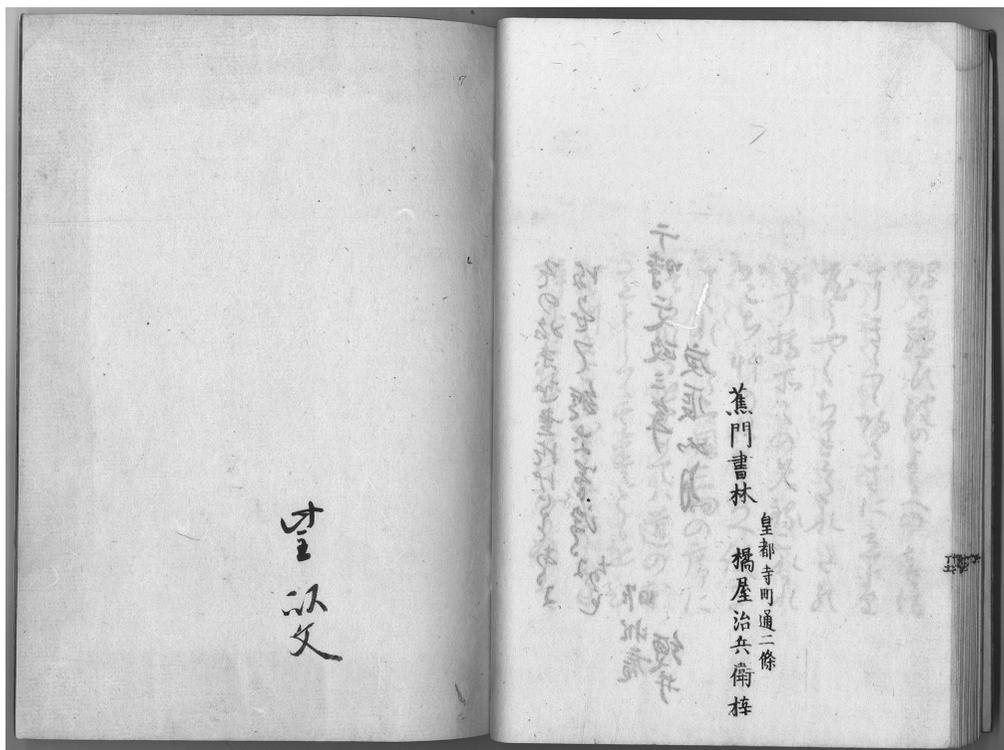


三九

(図版6) 跋文末尾(「廿四」ウ・「廿五」オ)



(図版7) 刊記(「廿五」ウ)・持主墨書(裏表紙見返し)



## The memorial collection tribute to Sokin “Hanafurumichi” : reprint and introduction

ITO Yoshitaka  
(Rissho University)

### [Abstract]

“Hanafurumichi” is a memorial collection tribute to Gagakutu-Sokin. Soteki, the editor, is Sokin’s son. “Hanafurumichi” is an important collection for understanding the exchanges between haiku poets in the Chugoku region, especially in Izumo Province.

Keywords: Haikai, Mino-ha, “Hanafurumichi”, Gagakutu-Sokin, Soteki